

『グローバル天理』第4号（通巻28号）掲載論文要旨

井上昭夫 「巻頭言 天理大学地域文化研究センターの発足」

天理大学の「建学の精神」具現化にむけて、地域文化研究センターが発足した。国際化の中の地域文化という視点から、異文化社会の学際的研究およびその研究方法を追究すること、そしてそのプロセスと成果をまず全学的な教育と研究に反映させることを目的としている。3つの共同研究と3つの「国際参加」プロジェクトから出発することとなった。

荒川善廣 「「元の理」の探究（13）—人間と存在〔4〕」

「元の理」の後半部を、「成人への理ばなし」という視点からとらえると、出直しが成人につながるということが語られている。そのさい、出直しには二通りの意味がある。一つは、身体は生きた状態で、心が出直すことである。この場合には、人間は生きながらにして生まれかわることができる。もう一つの出直しは、身上を返すことである。この場合には、出直した人間の魂は、いずれ別個の人格として生まれかわることになる。この世の人間は、通常、魂と心と身体が一体となって生きているが、例外として、魂が抜け出たあとでも、身体だけしばらく生き続けていた事例が、教祖の言葉として伝えられている。

宮田元 「宗教・スポーツ・教育（8）—宗教とスポーツ〔6〕」

ゲームにはそれぞれ独自のルールがあり、ゲームに参加する者は、一時的に現実の世界とは別の世界に身を委ねることになる。ゲームは限られた時間と空間の中で完結する活動であるが、現実の世界にはそのような完結性はみられない。ゲームの世界はゲームのルールの支配する世界であり、より明確な、より完全な、より完結的な世界をみせてくれる。ルール支配の活動はしばしば儀礼にたとえられる。1896年、クーベルタン(Pierre de Coubertin)が古代ギリシャのオリンピックを復活させたが、それはすべての国家間の相互理解をはぐくむために人類和合(human-unity)の祭典として心に描いていたものであった。

末延岑生 「ことばと教育（13）—ことばの元を探る〔13〕」

耳はわが心の思うままに聞くことができるように貸し与えられている。人間が人間らしく生き、行動するためには、その使い方が問題なのである。聴覚は、言語音を聞くときには、単に普通の物音を聞くのと違って、脳の中樞神経系が最も大きな努力を払わなければならないし、それに加えて、暗闇では最も感覚が鋭くならざるを得ない。こうした条件の中で音声言語は発達したのだろう。

つぎに、目は積極的に自分の意志でものを見るための道具として貸し与えられている。私たちは38億年以前からの物の見方がすべて蓄積されて、その基盤に立って見聞きしているのである。サルや他の動物達が見えないものが、人間には当然見えるように、聞こえるように仕込まれている。天理の教えで「見るも因縁、聞くも因縁」といわれるゆえんである。動物達はえさを狙って目の筋肉細胞を on にする。人間は何を狙って on にするのか。それは人間が人間らしく生きるために与えられた課題である。人は目で物を確認しながらことばを獲得してゆく。また、読むこと、書くことにおいて、視覚器はなくてはならないものである。

皮膚感覚、中でも痛覚は大難を小難で食い止めることができる器官で、むしろ喜ぶのが本筋である。病気も人間の創造主である神の、親心としての「手引き」だと古くから諭され、むしろ生きてゆく上での花道だと肯定的、積極的に捉えられてきた。

喜びの器官が生み出す感動と喜びは、「おいしい」、「ほしい」、「にくい」、「かわいい」のほこりに対応するもので、こうしたほこりを和らげる大きな力を持つ存在だと考える。

金子 昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—(19) 教学編 天理経営学とは [4] ベンチャー企業と「あらきとうりよう」」

現在、我が国は「平成大不況」のさなかにある。今や大企業であっても安閑としてはおれない時代である。むしろ若いうちに夢を持って、ベンチャーを起こしてみるのも面白い。独立して新たに起業していくためには、「梃子(てこ)の原理」を使って、人的ネットワークを最大限活用することが求められる。起業するには、何よりも夢と情熱が必要である。天理教では、荒道を開拓する布教伝道の人材を「あらとうりよう(荒木棟梁)」と言う。単独布教もベンチャーの1モデルだろう。こうした布教精神でもって、事業を起こすこともできるはずである。

堀内みどり 「天理異文化伝道(26) 天理教のコンゴ伝道 [25] —2代会長時代(1967-1971) [6]」

清水は柔道指導者としても活躍し、柔道選手権を開催。上位2名を天理大学へ送り、柔道研修の機会を作った。柔道は、コンゴでの天理教の信頼を高める一助になっていった。一方、赴任3年目頃から、子供の名付け親になった清水は、まさ おと名付けた子供の葬儀で、母親の心に「かしもの・かりもの」の教えが治まっていることを知り、たいへん感動した。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（28）現世と来世」

今回は、日本人の持つ死生観の多様性について言及してみた。そこには、シャマニズムやアニミスティックな死生観が沈潜し、その上に外来思想(仏教等)が覆いかぶさっている現状がはっきりと見て取れる。そしてそれらが天理教の死生観の土壌を形成しているのである。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（28）一踊りと囃子の循環」

そもそも舞踊が具体的誰かが現に踊るというひとつの行為としてしかあり得ない以上、教えるとか習うとかいうことも、具体的誰かの踊りを離れて成り立たない。習う側は、何かモノ的な対象としての踊りにではなく、教える人間に直接向かい合う。

とすれば、どんな踊りをどのように踊らせるかということは、当然踊らせる側の身体の問題として捉えられなければならない。一つ一つの踊りの特質とは、単に踊りのジャンルのことではなく、具体的踊りを踊る踊り手の動きの質として捉えられる。このことを念頭に、実際に民俗舞踊を演じる踊り手どうしの関係、踊り手と囃子手の関係を考えてみよう。

多くの民俗舞踊の場合、舞い手は舞い手、囃子手は囃子手といった固定的役割分化をもたないことが多い。こうした役割分担の流動性は、単に歴史的、社会学的条件だけではなく、民俗舞踊の生命ともいべき当為即妙の自由さに結びついている。

楽器を習う時、あるいは踊りを習う時、演者は「口唱歌」と呼ばれる言葉を聞かされ、覚え、それを手掛かりに音や動きの流れに乗ってゆく。すなわち、音や動きを分節化する。ここでは、音と動きが同じ物差で分節されている点に大事な鍵がある。すなわち、特に民俗舞踊の場合、音と動きが同じ言葉で捉えられという点が何より大切なのだ。同じ物差を共有するという意味で、音と動きは相互に入れ替え可能である。その音と動きを、実際の舞台上で別々の人間が分担し合っている。

実際の場面では、通常、踊り手が伴奏に合わせて踊るというより、囃子の側から踊り手の呼吸や動きを読みとり、それに応じてゆく場合が多い。踊り手は自由に踊る。

囃子方は、その動きに合わせてゆく。しかも、単に動きに音を添えるという以上に、動きの呼吸を受け止め、それを増幅して踊り手に投げ返す。

太鼓や唄声にはそんな増幅された勢いがあるからこそ、踊り手に一層弾みがつき、ますます自由になる。それだけに、囃子手が踊りを知っていることは不可欠で、当然、囃子手も踊れなければならない。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（26） 生殖技術とジェンダー [4]

1973年、連邦最高裁は妊娠三ヶ月までの中絶を合法化した。しかしこれを契機に中絶をめぐる激しい内戦がはじまる。1980年代には「プロ・ファミリー」を掲げるニュー・ライトが、ERAとともに中絶を政治問題化し、どちらも家庭やジェンダーをめぐる既存の社会秩序を破壊するものとして批判した。そして1982年、ERAは不成立となる。

※ERA=equal rights amendment

上杉武夫 「都市の再生に向けて—アメリカ通信（21） 東アジアの庭園 [2]」

絵画性、理想性、抽象性は地理気候の点から東アジアの庭園の持つ特質とされている。大陸・半島・島の形態がこれらの特質の形成に関与している。さらに、誌的庭園の意義と自然との共生は東アジアの庭園に顕著である。簡素美は日本庭園における最も力強い特質であり、東アジアに展開した庭園の到達点であろう。